

<(2021年5月9日)の聖日礼拝 証しおよびメッセージ要約>

「荒野で優しく語る主」 ホセア2:14、詩篇103:1～5他 三浦真信牧師

<新型コロナウイルス肺炎に罹患して>

2021年4月初め、復活節の礼拝が終わった翌日から発熱があり、検査をしたところ新型コロナウイルス陽性でした。熱が下がらないため翌日入院となり、お迎えの車が来て保健所で指定された病院に搬送されました。かなり感染には気をつけていましたし、特にその2週間以上前までを振り返っても、感染源が全く思い当たりませんでした。その後、家族を含め濃厚接触者も検査しましたが、全員陰性でした。それだけに、今回の入院は神さまが私に対して(また家族、教会に対して)、大きなご計画を用意しておられるに違いないという確信となりました。

病院に着くと防護服の看護師たちが来て、荷物を持ってコロナ病棟に案内してくださいました。そしてすぐにレントゲン検査があり、肺炎も見つかりました。部屋に案内されると、すぐにコロナ病棟での担当医師が来てくださいました。医師から、「肺炎が数か所に見られたので、重症化しないように薬をしっかり飲み続けてください」と言われました。

病室に案内され、少し疲れてベッドで横になっていると、幼い頃からの自分の人生が次々に心に浮かんできました。しばらくの時間、まるで映画でも見るかのように自分の人生を振り返っていました。そして最近のことにまで及んだ時に、「何て良い人生だったのだろう」と感謝が溢れてきました。何一つ辛かったことや悲しかったことを思い出すことができませんでした。「このまま死んだとしても十分だ」と思った途端に、「そうだろう。私は良いものしかあなたに与えていないのだよ」という神さまからの語りかけがありました。新型コロナ肺炎と聞いて少し感傷的になっているのかと思っていたけど、そうではなく神さまが自分の人生のダイジェストを見せてくださり、「あなたの一生を良いもので満ちたらせる」(詩篇103:5)という、みことばの真実を見せてくださったのだと気づきました。

入院直前までの私は、どちらかというと不平を訴える祈りが多かったように思います。次々に祈っていたことと反対のことが起きて、心の奥に「全然神さまは、良いものを与えてくださらないではないですか」という、みことばを否定するような叫びがありました。しかしそのような思いが一気に感謝に飲み干されてしまうような不思議な時間でした。「あなたの一生を良いもので満ちたらせる」という聖書の言葉をどこかで否定していた自分を恥じました。新型コロナウイルス肺炎で入院するという出来事も、このみことばの真実を確認するためだと知り、その感謝が入院中ずっとありました。

その日から食前食後、大量の薬が出されました。新型コロナウイルスのための特効薬はまだ無いため、重症化しないための予防薬が処方されました。38度以上の熱がずっと続き、薬の副作用かウイルスによるものかわからない吐き気が数日続きました。そのうちに味覚嗅覚障害が始まり、何を食べてもゴムのような臭いと変な味がして、食欲も無くなりました。段々

血中酸素の値が低くなり、呼吸も荒くなり、酸素吸入を装着するようになりました。酸素マスクをしないと、息苦しくて溺れているような感覚でした。入院して三日目にはほとんど歩くこともできなくなり、ナースステーションに一番近い、レッドゾーンと書かれた部屋に移りました。コロナの場合、体内にカビの一種が繁殖することがあり、それが増え広がると重症化にも繋がると入院初日から聞いていました。それを予防する抗菌剤も飲んでいましたが、レントゲンと血液検査で、その兆候がある時に見られたため、ステロイド点滴もその日から毎日するようになりました。

からだは辛かったのですが、初日からの神さまへの感謝な気持ちがずっと心を支配していたため、その辛さも緩和されていました。またコロナ病棟という、誰も立ち入ることのできない場所でしたが、たえずメールや line など、多くの方が励まし続けてくださいました。

その後も、医師から「肺炎が悪化しています」「リンパ球の数値が普通の人の3分の1まで落ちています」「何とか重症化しないように重要人物として注視しています」など、厳しい状況を聞く日が続きましたが、不思議に平安でした。

入院して9日目の朝、PCR 検査も陰性になりましたが、まだステロイド剤の点滴、酸素吸入は続けていました。初日からの感謝の思いがその朝もありました。家族に対しても、「いろいろあったけど幸せだったな、良い家族に恵まれたな」と思った途端に、妻に対して自分がいかに酷いことをしてきたかが思われました。今年5月で結婚32年になりますが、彼女は子どもの頃からの夢だった仕事を辞めて、共に開拓教会に仕えてくれました。

誰も知らない慣れない土地に来て、不安を感じている彼女に私は寄り添うことができず、むしろ彼女を責め続ける態度をとっていました。そして何かあると、これまでも同じ態度をとってきたことを思い、それでも愛想を尽かさずに一緒にずっといてくれたことに感謝が溢れてきました。そしてすぐに彼女にメールで、謝罪と感謝を伝えました。彼女からもメールの返信で、私が新型コロナ肺炎で入院したことで何日か眠れない日もあったけど、これまでの感謝とともに、「みことばを通して、主が必ず返してくださるとの確信を得た」ことなど、わかちあってくれました。私自身が病で弱くされ、主の取り扱いの中に置かれなければ、そのようなやりとりもできなかったことと思い、それだけでもこの入院は意味のあることだったと思い感謝しました。

11日目の朝、医師から「PCR 検査が3回陰性になったので、一般病棟に午後移動します」と言われました。まだ酸素吸入もしていましたので、車イスで1階上にある一般病棟に移りました。コロナ病棟ですずっとお世話になった看護師さんたちが、初めて防護服を脱いで車イスを押し、荷物を運んで一般病棟まで見送ってくださいました。皆さん20歳代位の方たちでした。毎日体温、血圧、血中酸素、薬のチェックや採血、点滴に来てくださり、部屋の掃除や食事のことなど何もかもしてくださっていました。コロナ病棟では防護服は来ていますが、コロナ患者に普通に接してくださり、質問すれば丁寧に答えてくださり、感染リスクの高い最前線で働く彼らには頭が下がります。最後車椅子に座って、何度も「ありがとう、ありがとう」と

お礼を言い、皆さんも「良かったですね」と言って手を振ってくださいました。医療関係者の方々のために、今まで以上に祈っていきたくと心から思いました。

一般病棟は、まるで別世界のようにでした。医師や看護師たちも、普通にマスクだけで接してくださいます。スタッフの方たちの元気な声が廊下からも聞こえてきて、活気がありました。同じフロアのラウンジやトイレには、酸素マスクを外して歩いていくこともできるようになりました。その頃には、味覚障害もほぼ無くなっていて食欲も出て来たので、その日の夕食から、これまでのお粥かゆから普通食に変更していただくことになりました。

夕食前に主治医が来てくださり、私が入院してからの血液検査の数値と一日おきに撮ったレントゲンの写真を見せて、どのような状態であったかを詳しく説明してくださいました。入院してから肺炎が悪化し、血液検査でもリンパ球などほとんどが標準値をかなり下回り、改めて危険な状態であったことを知りました。神さまがいのちを守ってくださったのだと思い、感謝が溢れてきました。

その後夕食が運ばれてきました。これまでのディスプレイザブル(使い捨ての)ではなく、お盆に器で暖かい食事が運ばれてきました。食前の祈りを始めた途端に、神さまの愛が迫ってきて、しばらく泣き伏してしまいました。嗚咽なきげんが止まらず、恥ずかしくてタオルを口に入れて声をおさえていました。そしてようやく少し落ち着いて祈り始めました。「主よ、あのまま重症化して命を失ってもおかしくないような状況から、あなたは私を生かしてくださいました」。感謝が溢れてきました。

私は、生まれた直後に医師から見放されるような病気から奇跡的に癒いよされました。小学校6年生の時に自殺未遂寸前で命拾いしました。学生時代罪の中で霊的死を経験しました。そして4度目、また死からいのちに移されたのだと思いました。

その感謝と同時に、悔い改めの祈りが次々に出てきました。神さまの言葉を語りながらも本気で信じていなかったこと、感謝より不平が心を支配していたこと、神さまよりも自分の欲を優先していること…など、様々な罪が示され悔い改めました。自分が神さまにささげられた生贄いけにえとして焼き尽くされていくような感覚でした。「あなたがたはこの山に十分長くとどまった。向きを変えて出発せよ」(申命記1:6~7)のみことばが迫ってきました。「主よ、あなたは罪の中に死んでいた者をこれまで何度も生かし、そしてまた、いのちを与えてくださいました。今生きているということは、私のために『死んでよみがえった方のために生きるためです』(Ⅱコリント5:15)。あなたに仕えます。再度あなたにこの存在をささげます」とひれ伏しました。

食事が運ばれてきてから30分以上は経っていました。食前の祈りが、感謝、悔い改め、再献身を告白する祈りの時間となりました。このようなことは、大きな聖会などで体験するイメージがありましたが、一人の食前の祈りでも、聖霊の力強い働きが起きることを知りました。このことは今のコロナ禍でなかなか集まれない中でも、一人ひとりの祈りの場が恵みの場に十分変えられるという確証となりました。

夕食をようやく食べようと思ったら、コロナ病棟でお世話になった医師が初めて防護服を脱いで白衣で様子を見に来てくださいました。満面の笑みで、「三浦さん、一般病棟に移れ

てよかったね。結構辛かったでしょう。もう回復に向かっているから大丈夫ですよ」と言ってくれました。そして目を真っ赤にしている私の顔を見て、「あれ、泣いてるの？本当に良かったね！」と、私が一般病棟に移ったことを喜んで泣いていると解釈してくださったようです。何とか重症化しないように、医師たち・看護師たちが必死で格闘してくださっていたことをひしひしと感じ、何度もお礼を伝えました。

そしてようやく夕食のお椀の蓋を開けたら、その日はちらし寿司でした。普通メニューで、シンプルなちらし寿司でしたが、何となく神さまから「おめでとう。合格だよ！」と祝っていたような気がして嬉しくなりました。神さまは、大切なことは忘れないように、いつもその前後に印象的な出来事をいくつか用意してくださっています。

神さまは、あえて私をコロナ病棟という誰も立ち入れない一人の場所に導いて、そこで優しくみことばを語りかけ続けてくださいました(ホセア2:14)。実は入院前までの3年間ほど、私は暗いトンネルの中にいるような時期を過ごしていました。真っ暗な気持ちで夜中に目が覚めて眠れなくなったり、少しのことでイライラしたり、心の中がいつも泣き叫んでいるけど涙は全く出なかったり、感謝の祈りをしてもすぐに不平の祈りになっていたりしました。「もっと神さまと濃密な交わりをしたい」と魂は叫んでいました。実はそれこそ心の底で私が求めていたことなのです。神さまとの交わりのために毎日時間をささげていましたが、深いところで神さまとの関係が希薄であることを感じていました。それがここ最近のトンネルの中にいるような状態の原因でした。一人の場所に追いやられ、神さまと水入らずの交わりが与えられ、神さまはたえずみことばを語りかけてくださり、みことばが真実であることを味わわせてくださいました。神さまの優しいみことばの語りかけがたえずあり、神さまのご愛をいっぱい受けながら、神さまの懐の中で嬉しくて思いっきり泣かせていただきました。私が神さまと濃密な交わりをするためには、病で弱くされ、何もできなくなり、一人になる必要があったのです。神さまのなさることは深くて計り知れません。ただただ主の御名を崇めるばかりです。

入院生活の半ばで、数名の牧師たちが励ましの動画を送ってくれました。一人ひとりのコメント、祈り、讃美に「アーメン、アーメン」と応答しながら、感動して何度もベッドで見ました。その中で、一人の方が「**知れ。主はご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる**」(詩篇4:3)を読んで、私が神さまの恵みに浸っていることが羨ましいとおっしゃった後に祈ってくださいました。私はふと、これまで神さまのあわれみを何度も受けていながら、いつしかそれよりも、他の人たちが神さまから特別扱いを受けているのが羨ましいような、妬ましいような思いがあったように思います。しかしこのみことばが読まれた時に、「キリストの恵みによって聖徒とされた私を、神さまはこんなにも特別に扱ってくださっているではないか」と、また感動して涙が止まりませんでした。そしてご自分の聖徒として特別に扱ってくださる「私が呼ぶとき、主は聞いてくださる」というみことばの約束がとても力強く迫ってきました。「ここがブレていたから、祈りに力がなくなっていたのだ」と気づきました。かつて、神さまから離れて放蕩三昧して、再び立ち返った時に、「私ほど神さまから愛されている人はいる

だろうか」と思うほどに、神さまのご愛が嬉しくて仕方がない時がありました。しかしいつしかその神さまの愛を忘れていたのかもしれない。

退院する2日前、朝早く目が覚めて、ふと不安が出てきました。「主よ、再献身しましたが、これから私は何をすれば良いのでしょうか。自分の中からは何も出てきません」と祈っていると、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」(マタイ11:30)との主の答えがありました。その時、「そうだ、この入院中もずっと主が寄り添ってくださり、共に荷を負ってくださっていたから、辛いはずの闘病が不思議に楽に通り過ごすことができた。同じことをこれからも経験させてくださるのだ」と気づきました。主が共に負ってくださるくびきは負いやすく荷は軽いことを、神はこの入院中に身をもってわからせてくださいました。「もう自分で負うのはやめよう。主が共に負ってくださるから、ただ主について行こう」と安心しました。

翌日退院が決まった日に、友人からインドで宣教していた方が新型コロナに感染して召されたというニュースが届きました。まだ成人していない3人のお子さんがいて、奥様も感染して集中治療室で療養中とのことでした(奥様はその後回復して退院しました)。インドでは、一日の感染者がその日33万人を超えていました。病院も医療崩壊を起こしていて、酸素吸入が必要なのにできない人もたくさんいました。私の場合も、そのような環境下でしたら命を失っていたかもしれません。とても心が痛み、そのご家族のために、また世界中で今も苦しんでいるコロナ患者のためにしばし祈りました。同時に改めて生かされたことの重みを感じました。

入院して16日目の退院する朝に、「こんなにも神さまと濃密な時間を過ごして、普通の生活に戻れるのだろうか」と不安になり、神さまに問いかけました。そして聖書を開くと、「わたし主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握る。あなたを見守り、あなたを民の契約として国々の光とする。こうして見えない目を開き、囚人を牢獄から、闇の中に住む者たちを獄屋から連れ出す」(イザヤ42:6~7)とのみことばが心に迫ってきました。入院中と同様にこれからも、主が私の手を握り、主が私を見守ってくださる。そしてコロナ禍という闇の中に住むすべての人々に、生けるキリストを証しするように、国々の光として主は罪深い私をあえて召してくださいました。残された生涯、主がしてくださったことを証してゆきたいと願い、主の臨在満ちあふれた病室からまた遣わされてゆきました。

入院中は教会を初め、多くの方々が祈り続け、励まし続けてくださいました。私の知らないところで、多くの方が祈ってくださり、また退院後も肺の後遺症のために祈り続けてくださり感謝でいっぱいです。とりなしの祈りの力をからだで実感しました。キリストが2000年以上前にガリラヤ湖周辺で多くの病の方を癒されましたが、今教会の祈りを通して、神さまは癒しのみわざを行っておられます。もちろん病を通して受ける恵みも大きいですが、病の方たちの癒しのために、これからも祈り続けていきたいと思えます。

「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」(詩篇103:2)。すべてのことを益としてくださる神(ローマ8:28)をほめたたえます！